

(田中美知太郎「生きることを考えること」 弥生書房 抜粋)

考えることのよろこび

—考えることのよろこびというようなものに対しては、おそらく冷淡なひとのほうが多いのではないかと思う。わたしたちは日常あれこれの考えごとに悩まされているのである。かくて人々はそれらの憂いを忘れるために、飲み物や読みもの、あるいは見るものなどを求めたりする。困難にぶつかって、これを正視することができず、何か他のことでこれを忘れようとするのもあまり幸福なことだとは言えない。

考えごとから開放されるためには、わたしたちはむしろ考え事そのものに徹すべきではないか。すなわち困難打開の方法を正面から考えてみることである。

—正面から困難にぶつかって、これを打開するためお手段を困難な事柄そのものの中に探し求めて、あらゆる工夫と努力をつくさなければならない。考えごとからの開放は、このような努力の後に、はじめて得られるといつてよいだろう。

自由に考えるということ

習慣に従い、惰性にしたがって考えるのが一番楽だ。しかし、事実はそれが一番不自由な思想なのである。わたくしたちは油断をしていると、ついに地上の習慣にひきずられてあまり確かでないものでもついうかうかと信じこんで、確かなことのように思うものなのである。デカルトは、この信じやすい傾向に対して過激な対抗策を必要だと考えたのである。

自由に考えるということは、前提なしに考えるということではなくて、むしろ前提を忘れずに考えるということなのである。すなわち、自由にものを考えるとは、科学的に考えるということなのである。

一国の政治といえどもこれに異なるところはない。人は国内事情と国際関係の刻々の変化に留意して、つねに国策を再検討する用意をしていなければならない。

—ひととは論理によって考えるのであって、論理のなかから何かを考え出すのではない。哲学体系をなにかひとつ呑み込んで、それで満足するようなひとたちに何も期待することはできない。哲学は考える自由を保持するためのものである。

教養について

教養は専門家をつくるものではなく、一般的な意味において人間をつくるものである。「人間らしさ」を意味するラテン語「**Humanitas**」が、ギリシャ語の「パイディアー」の意味でなければならないことがすでにローマ時代の文人によって論じられている。われわれが教養として取り入れるものは、社会人として職業人として必要とする知識や技術ではない。

また教養は風雅の楽しみというようなものでもない。もっと人間形成的な一面がある。

それは単に社会が要求しているだけの実際の役に立つ人間をつくるというようなことを超えて、もっと高いところに自己完成の理想や自己形成の目的をおくことになる

ヒューマニズムの意味

ヒューマニズムとは何であろうか。それは広く人間の生活について、深い関心をもつことである。ヒューマニズムとは、難しい教義のことではなく、人間を愛し、人間に興味をもつ態度である。

われわれが求めているヒューマニズムは哲学説としてのヒューマニズムではない。人間を万物の尺度であるとする立場ではない。ことさらに人間中心の理論や認識論ではない。それは「人間」を主張することではなく、「人間的 human」なものに深くひろく、また関心をもつことなのである。